

図2—133 庄屋塚古墳出土遺物実測図

山古墳及び庄屋塚古墳」『福岡大学考古学研究室研究調査報告』第三冊、二〇〇四)

六 橘塚古墳 (国指定史跡)

概要

庄屋塚古墳が位置する同一丘陵上、五〇〇坪ほど南西に橘塚古墳はある。町立黒田小学校の敷地となり、古くから児童たちの遊び場となっていた。

古墳の西側には鉄骨三階建ての校舎が近接し、その周囲もかさ上げされて古墳の西裾を覆い、南側は一〇坪ほどの距離をおいてコンクリート造りのプールが設置されている。東側は忠魂碑を中心に公園化され、北側は空地の部分もあるが、北東部付近は町立保育所の敷地となって各種遊具が置かれている。長期にわたってなされたこうした地形改変ではいずれも発掘調査は行われていない。

国指定史跡であるが、公表された資料は昭和十二年(一九三七)作成の石室実測図のみであった。そうした事情から、町教育委員会は町内の主要古墳の資料作成を行うために調査費を計上し、平成七年度(一九九五)にまず橘塚古墳の調査に着手した。折しも、宮崎

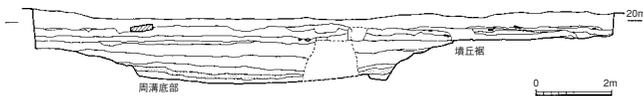


図2—134 橘塚古墳第1トレンチ土層断面図 (1/200)

※網かけ部分は黒色土層

大学が綾塚古墳の石室実測調査を行っていたことから、翌八年度（九六）は共同して橘塚古墳の第二次調査を実施した。

平成七年度の調査

墳丘測量を主目的とし、一部トレンチを設定して墳丘・周溝の範囲確認を試みた。

墳丘測量 この古墳の墳丘測量はなされたことがなく、従来、直径四〇以上の円墳と考えられていたが、前述のように墳丘は蚕食されて旧状をしのぶことが困難な状況であった。

墳頂部はやはり地形改変されていて、標高二七以上の高さで直径一〇以上の平坦な面となる。等高線が拾えるのはそこから標高

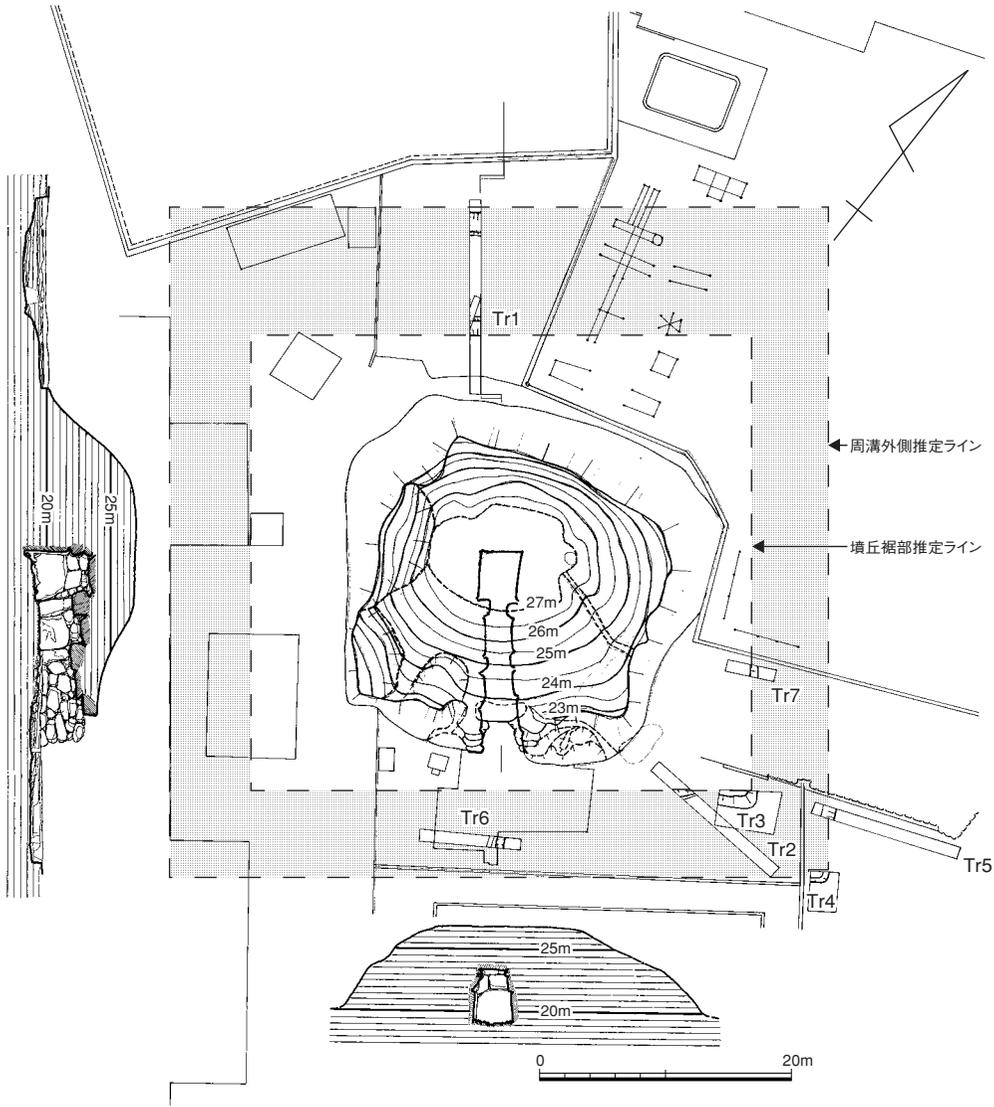


図2—135 橘塚古墳墳丘推定復元図 (1/600)



1



2



3



4

写真2-24 橘塚古墳発掘調査状況

1. 石室開口部前面 2. 羨道・前室敷石検出状況
3. 羨道部土層横断面 4. 墳丘前面須恵器出土状況

二四畝付近までで、それ以下は大部分が削り取られ、校舎のある西側では特に甚だしい。現状で盛土の高さは約七畝強を測る。

墳丘規模は直径三〇畝弱を測るが、墳形を云々できる状況ではなかった。

第一トレンチ 主体部背面、主軸のほぼ延長線上の空地に設定し、墳丘裾部・周溝を確認した。周溝底部には暗黄褐色土、その上部には黒色土（腐食土）がのり、この中から須恵器片が出土している。更に灰褐色土が覆う。周溝上部幅一〇・四畝、

底部幅六・六畝、深さ一・一畝を測る。ちなみに、トレンチ内には巨大なコンクリート塊が埋没していた。古墳北側にはかつて小学校の木造講堂が建てられており、その解体時に遺棄されたものである。

第二トレンチ 墳丘東側に開けた小規模なトレンチで、ここでも墳裾を確認できた。周溝には第一トレンチとほぼ同じ土が堆積し、深さは一・二畝であった。

平成八年度の調査

前年度の調査を受けて、墳丘・周溝の形態・規模の確認を行

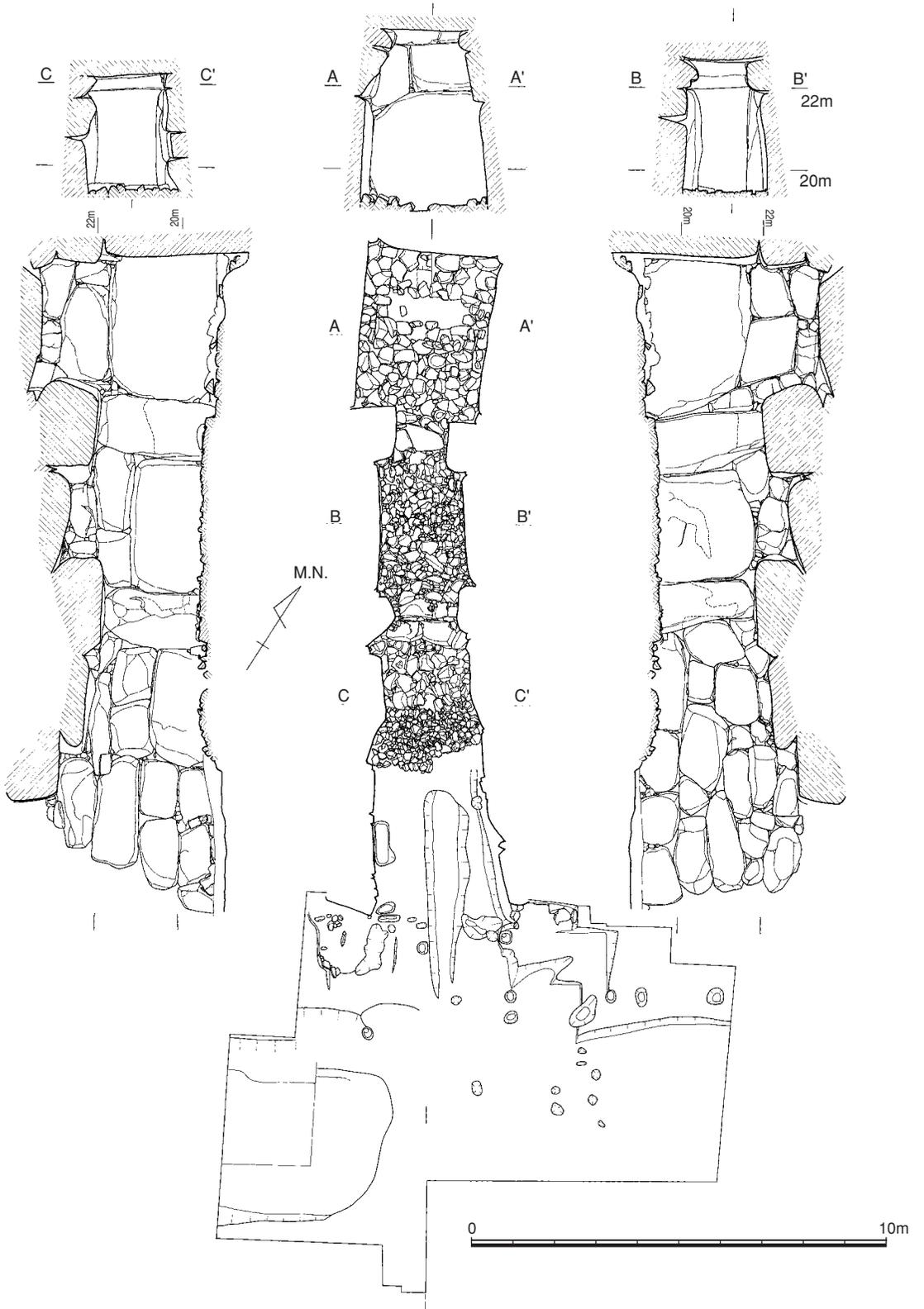


图2—136 橘塚古墳主体部実測图 (1/150)

うべくトレンチを設定した。また、宮崎大学の協力を得て石室の調査も行った。

第三トレンチ 墳丘東部に設定。墳裾部が直角に曲がるコーナーを検出し、このことから古墳の本来の形態が方墳であることが確認できた。周溝の深さは約〇・三メートル、下から順に黄褐色土・黒褐色土が堆積している。

第四トレンチ 第三トレンチの南東に設定したもので、周溝外側のコーナーを検出した。この結果、周溝範囲をほぼ復元することが可能となった。周溝の深さは約〇・七メートルを測り、周溝底部から順に黄褐色土・黒灰色土・黒色粘質土・暗灰褐色土が堆積している。

第五トレンチ 第三トレンチの東側に設定し、周溝外側を確認した。周溝の深さは〇・六メートルを測り、黄褐色土・黒褐色土・暗灰褐色土が堆積している。

墳丘前面調査 石室南側の墳丘・周溝の範囲、土層の堆積状況確認のため主体部主軸の延長線でトレンチを設定し、周溝を確認できた。下層に堆積した明茶褐色、茶褐色土の上部の黒色土（腐食土層）の中から須恵器大甕片が出土した。東壁土層断面でも同様の層序が確認され須恵器片が集積した形で出土している。

これらの調査結果から墳丘・周溝の平面形態・規模を復元すると、墳丘は南北方向三七メートル、東西方向三九メートルのやや横長方形

を呈する方墳で、周溝の幅は墳丘の東側で六・五メートル、北側で九・九五メートル、南側で七メートルを測る。周溝を含めた規模は南北方向五三・五メートル、東西方向五二メートルのやや縦長の長方形に復元できる。なお、校舎関係の構造物があるために墳丘西側の調査を行っておらず、以上の復元数値は石室中軸線を基準として反転したもので、必ずしも確定したものではない。また、墳丘そのものの調査を行っておらず、段築等は不明で、埴輪・葺き石は見えない。まだ残された問題は多い。

主体部

花崗岩の巨石を用いて構築された複室構造の横穴式石室で、複室構造の横穴式石室墳としては綾塚古墳と並んで国内最大規模に属する。石室現存長は約一六・三メートルであるが、調査により開口部端の前面にも石材の抜き取り痕が検出でき、これをもとに復元すると推定全長約一七・五メートルとなる。

玄室は三・二×四・〇メートルの長方形プランで、天井高は三・八メートルを測る。前室は三・二メートル×二・二メートルと幅が狭く、高さは三・一メートルで玄室よりやや低くなる。羨道は開口部に向かってハの字形に開き、最奥の天井石は前室のそれよりも更に低くなるが、その前面の天井石は再び高くなっている。

玄室から羨道までの床面で人頭大ほどの花崗岩を用いた敷石が検出された。玄室では最も大型の石材が使用され、かつ奥壁に寄った位置に敷石が見られない範囲がある。この付近から中

世の土器が出土しており、そのところに再利用されたもののようなものである。なお、横穴式石室は追葬を目的に構築されているため入口を開閉する必要があるが、閉塞方法はなお検討を要する。

出土土器

出土遺物には須恵器のほか十二世紀ごろの瓦器碗などを含むが、図示したものはいずれも須恵器である。量的には大型甕が多いが、復元困難なために口縁部付近だけを図示した。甕(八)はTK43型式に相当し、古墳の築造時期を示すものと思われる。六世紀末頃のもので、豊津町甲塚方墳と同時期に位置付けられる。

蓋 1は鈕と体部の四分の一を欠く。天井部の大部分を丁寧に篋削りで仕上げ、内面は灰を被る。口径六・二二。2は頂部が潰れた高い鈕をもち、体部の三分の一が残存する。外面は厚く灰を被るために調整痕は不明である。内面は丁寧に仕上げられている。口径は一・二二である。

壺 3は口縁部・体部の大部分が残存するが、底部付近が大きく失われることから脚台が付されていたものと思われる。口頸部は高く直立し、口縁部付近がわずかに膨らんで内彎する。体部は肩が張るものの球形を保ち、しっかりとした凹線で画された文様帯に櫛描刺突文を刻む。下位の凹線以下は丁寧に篋削りを行った後に横撫でで仕上げているようである。全体に丁寧に作られている。

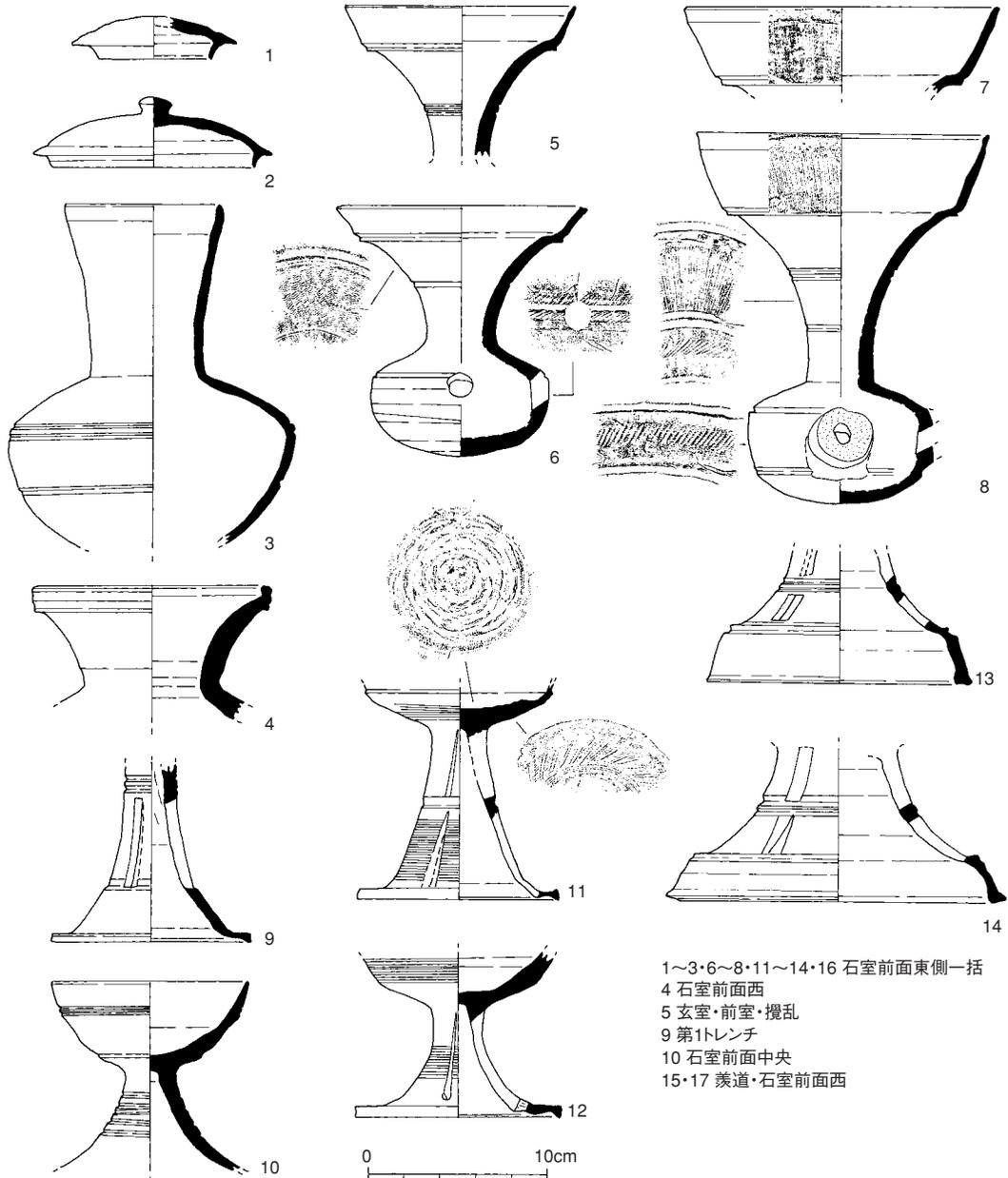
4は頸部が閉まり、口頸部が短く強く外反する。口端部は直

立し、外面がわずかに波打つとともに上面に丸みを帯びる面をもつ。胎土は精良で調整も丁寧になされるようであるが、特に内面で灰被りが著しい。

甕 5は無文の口縁部小片で、図下端付近が完周する。口縁部下位の突帯はシャープだが凹線は甘い。胎土粗く、調整も雑な感を否めない。6は口縁部の大部分を欠くが、ほかは完存する。体部は偏球形となり、最大径は中位にある。孔の上位に深く幅広い凹線を刻み、上下に篋描きの沈線を別個に刻む。頸部では中位に甘い凹線を刻んで文様帯を画するが、この凹線は部分的に二条となる。文様帯の櫛描波状文は繊細で、比較的丁寧なものである。口端部は内側に稜線をもち、全体に膨らむ傾向がある。底部外面は広く篋削りを行う。胎土は比較的粗い。7は口縁部の四分の一ほどが残存する。外面に非常に繊細な直線文を刻み、最後に口縁部付近を横撫でで仕上げる。胎土は精良なものではなく、外面は黒色に近く、内面は淡灰色となる。8は口頸部の一部と注口を欠くほかは完存する。体部の形状は6に似て、注口部上面に非常に深く明瞭な凹線を刻むが、下位のそれは浅い。この文様帯の上半に櫛描刺突文を付すが、施文後にその上下端を横撫でしている。頸部は体部から明瞭に屈曲して立ち上がり、しっかりとした凹線で画された文様帯を櫛描刺突文と繊細な篋描直線文を埋める。ただ、順序としては直線文の上に刺突文を刻み、その後凹線で区画するようである。直線

文は本来は頸部上端まで連続していたようである。口縁部外面も篋描直線文を施し、最後に口端部付近を横撫でする。なお、口縁部下端の突帯は非常に細く鋭い。底部外面は篋削りの後に丁寧に横撫でして仕上げていく。胎土は決して精選されたものではないが、全体に丁寧な作られている。

高杯 9は小片で、かつ端部を接合できないものを図上復元した。三方長方形透孔のようであるが、二段となるかどうかは確認できない。上位の二条の凹線も甘いものであるが、下位の凹線は甘い段といった方が相応しい



1~3・6~8・11~14・16 石室前面東側一括
 4 石室前面西
 5 玄室・前室・攪乱
 9 第1トレンチ
 10 石室前面中央
 15・17 羨道・石室前面西

図2—137 橘塚古墳出土遺物実測図1 (1/4)

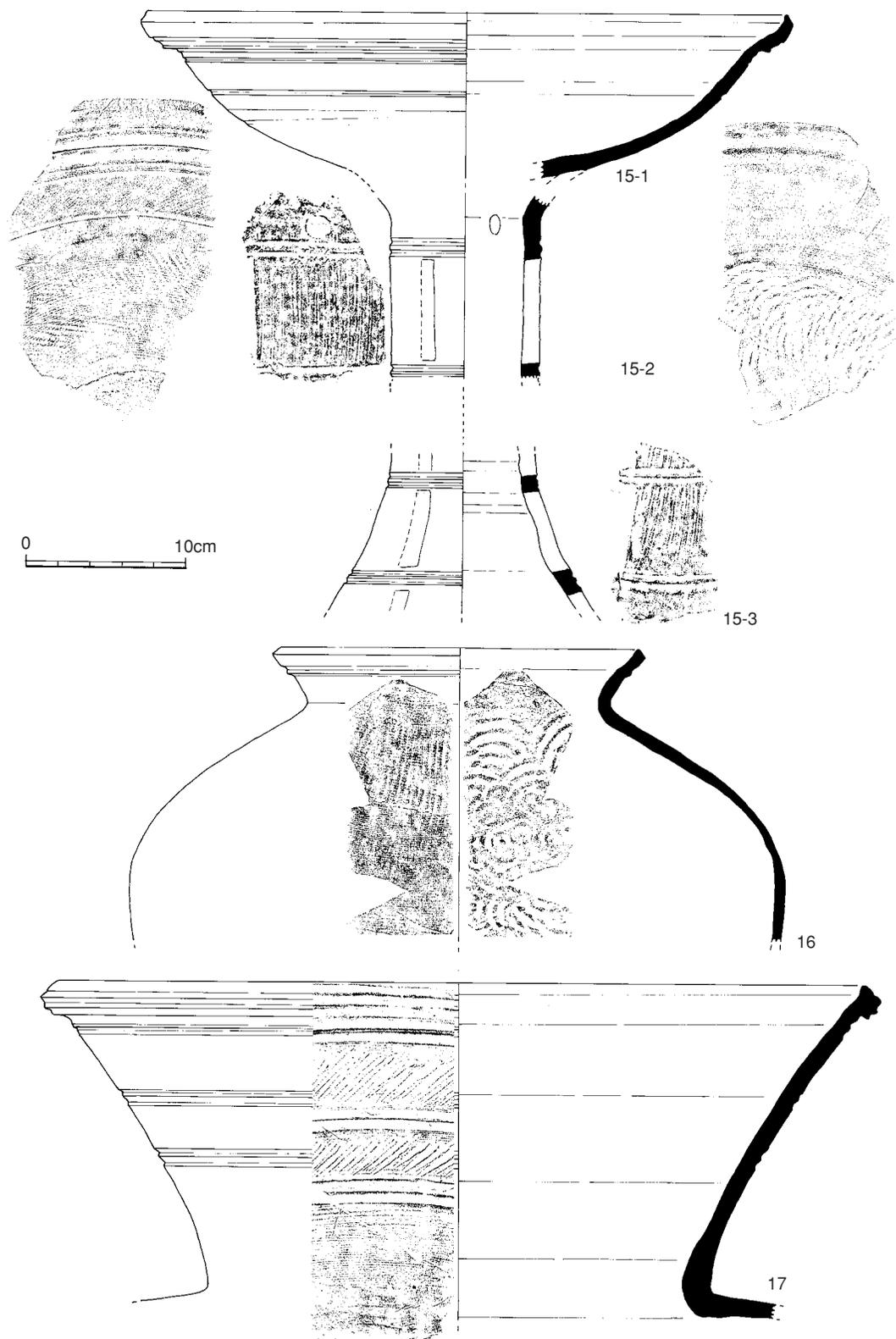


图2—138 橘塚古墳出土遺物実測图2 (1/4)

いものである。胎土粗く、焼成も甘い。10は図示した範囲で脚部がほぼ完周する。淡灰色となる焼成不良の土器で、器表も非常に荒れている。口縁部下位の二条の沈線は細く、脚部の凹線は甘く不明瞭なものである。11は三方二段透孔で脚部は全体を窺える。透孔は幅が狭い三角形で形状も不整、透孔間の凹線もとても甘いものである。下半には弱いカキ目が見える。杯部では内底面に同心円文を明瞭に残し、外底面にはカキ目と乱雑な櫛描刺突文が残る。12は脚部がほぼ完存する。四方一段透孔であるが、透孔は幅狭く、形状も不整で下端は丸くなっている。上部では外面下位に弱い稜をもち、その上位をカキ目で仕上げ、かつ内底面の調整が粗いことから脚付壺であるかもしれない。胎土粗く、作りも粗雑な土器である。

脚台 13は図示部がほぼ完存する胎土、作りともに精良な土器である。しっかりとした長方形透孔が二条のやや甘い凹線を挟んで三方二段に穿たれ、突帯や脚端部はシャープに作られる。外面は薄く灰被りとなって細部が不明であるが、内面は非常に丁寧な横撫でで仕上げられる。14は接合し得ないが全体の三分の二が残存する。これもしっかりとした長方形透孔が三方二段に穿たれ、凹線なども明瞭である。外面は全体に厚く灰を被って細部は不明、内面は丁寧に横撫でで仕上げられる。

器台 同一個体と思われるものの各部位が出土している。杯部(15-1)は浅く大きく開き、口縁部がさらに開いて受け口

状となる。口端部外面を面取し、その下位に鋭い断面三角突帯を一条巡らせてその下方に文様帯を置く。文様帯は上方を二条の、下方を一条の甘い凹線で画し、繊細な篋描直線文を刻んだものである。文様帯の下位は二単位ほどの篋削りが見えるが、さらに下位は平行叩きの上を三周ほどのカキ目で覆う。内底面には広く同心円文が残っている。脚部上端付近(15-2)は円形透孔と、それと千鳥に配された長方形透孔の左右の長辺が残る残片で、長方形透孔の上下は各二条のやや甘い凹線で画するようである。凹線間は縦方向の篋描(櫛描?)直線文で埋めるようであるが、浅く不明瞭で、かつ雑然としたものである。なお、長方形透孔は三方に配されるようである。脚部下位の残片(15-3)は透孔の長辺を一方に残すだけのものであるが、これを見る限りでは透孔は垂直でなく傾いて穿たれている。これらの胎土は比較的精良のようだが、焼成が甘いためか灰赤褐色(灰褐色)となり、粗雑な作りの印象を受ける。

甕 16は小さな口頸部に比して大きく張る体部をもつ。口端部は断面方形に近く作って内側をつまみ上げ、頸部中位に断面三角形の突帯を巡らせるが、突帯は不整で潰れる部分もある。胎土は比較的精良といつてよいが、作りは雑である。

17は口径五〇センチあまりの大型甕で、口頸部の二分の一ほどが残存する。口端部は外側に肥厚させて三条の突帯を連続させ、頸部はカキ目で埋めた後に二条一単位の凹線で文様帯を画し、

斜位の籠描直線文で飾る。胎土は精良といつてよい。

七 綾塚古墳(国指定史跡)

概要

この古墳は観音山(鹿ヶ峰)から延

びる丘陵の先端に位置する。昭和五十五年(一九八〇)、墳丘南東部の崖面崩壊に伴う整備がなされ、その際に墳丘測量調査が行われた。平成七年(一九九五)には宮崎大学・勝山町教育委員会により石室実測が行われた。

墳丘

山側部分を馬蹄形に掘って周溝と

し、その土を盛り上げて墳丘を構築したもので、墳丘南東部が崩れているものの、橘塚古墳に比べると残存状況は良好である。周溝は幅一五メートル、深さ五メートルほどの規模で掘削がなされ、溝底でも幅一〇メートルを測る。

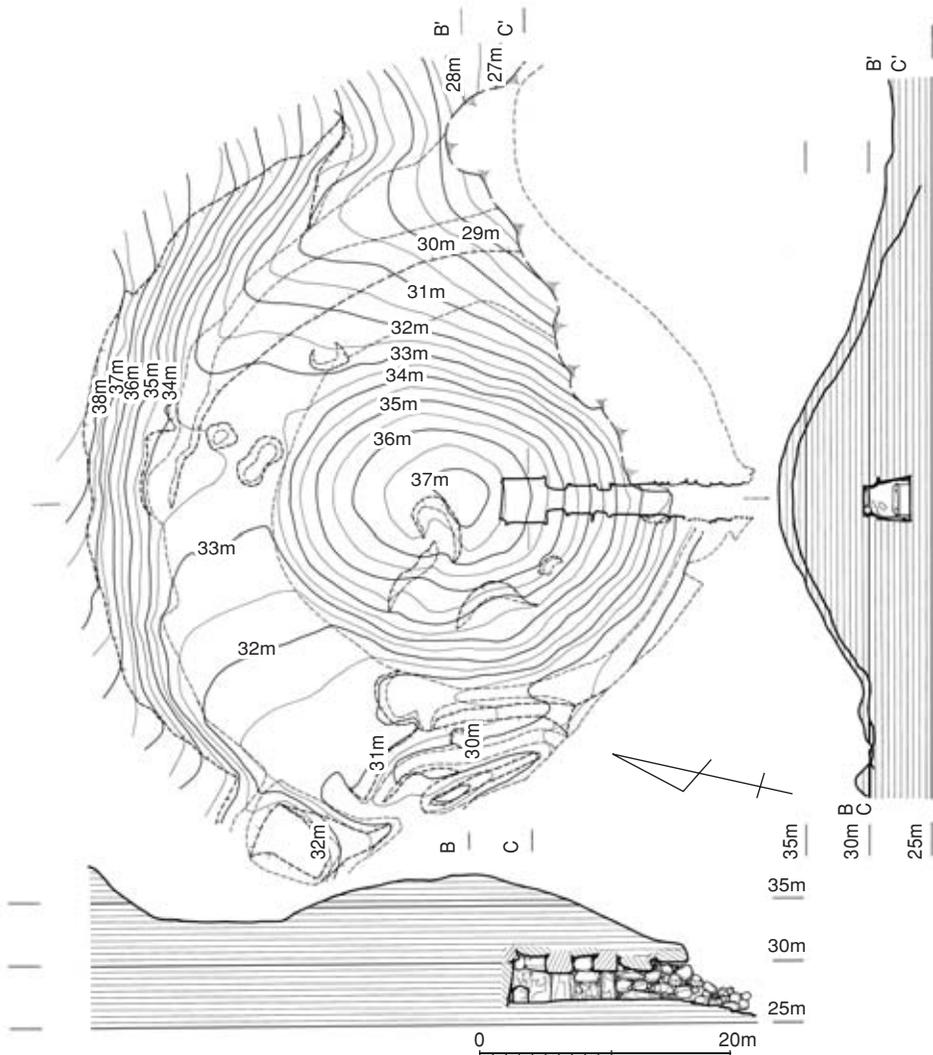


図2-139 綾塚古墳墳丘測量図 (1/600)